國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕ギンズバーグとその時代

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 淺井, 理恵子, Asai, Rieko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000675

ギンズバーグとその時代

浅井理恵子

「ギンズバーグ」と聞くと、アメリカ文学に詳しい人ならビート世代のアレン・ギンズバーグを思い浮かべるかもしれない。けれども、ここでは昨年亡くなったアメリカの連邦最高裁判事、ルース・ベイダー・ギンズバーグ（Ruth Bader Ginsburg）について書いてみたい。ギンズバーグはアメリカ史上2人目の女性の連邦最高裁判事で、晩年はポップカルチャーのアイコンになった。女性や若者を中心に熱狂的なファンが生まれ、講演会を開けば長蛇の列ができ、似顔絵が描かれたTシャツやマグカップが売れ、彼女の生涯に関する映画も2本（フィクションとノンフィクション）制作された。保守化が進む最高裁において、リベラル派の代表として判決の際に鋭い少数意見を提示し続ける姿が、アメリカの政治に倦んでいた人びとの心を掴んだのだろう。

アメリカ社会の方向性に決定的な影響力を持つ連邦最高裁判事は、日本とは比べ物にならないほど注目度が高い。判事は大統領が指名し、連邦議会上院の承認をもって就任する。定員は9名で終身職のため、一度就任すると長きに渡って影響力を持つ。大統領選でトランプに投票した人たちのなかには、彼が大統領になれば（そして判事職に空きができれば）保守派の人物を指名するから、という理由で票を入れた者も少なくない。

そもそもギンズバーグについて書こうと思ったのは、授業で彼女を取り上げることにしたからだった。映画を観たり本を読んだりするうちに、その劇的な人生にぐいぐい引き込まれていったのだが、同時に、アメリカ現代史に彼女の人生を重ねると、まさに「時代が人をつくり、人が時代を切り拓く」という表現がぴったりあてはまる気がする。

ニューヨークの決して裕福とは言えないユダヤ人家庭で育ち、最愛の母を高校の卒業式の前日にガンで亡くすという

悲劇に見舞われたギンズバーグだったが、アイビー・リーグの一校であるコーネル大学に進み、日夜勉学に励んだ。当時、アメリカ社会は赤狩り旋風が吹き荒れ、共産主義者とみなされた人びとは議会で厳しく尋問され、職を追われた。師事していた憲法学の教授から、多くの弁護士が立ち上がり告発された人びとの市民的自由を守るため議会と渡り合っているという話を聞き、感銘を受けたギンズバーグは弁護士を志すようになる。そしてハーバード法科大学院に進んだが、新入生約５００名のうち女性は9名だった。入学前に結婚していたギンズバーグは、1年先にハーバードに進んだ夫マーティンがニューヨークの法律事務所で職を得ると、コロンビア法科大学院に転学し、首席で卒業した。けれども女性でユダヤ系、さらに幼い子どもがいた彼女を雇ってくれる法律事務所はひとつもなかった。大いに落胆したギンズバーグだったが、１９６３年にニュージャージー州のラトガース大学で教授職を得、法律を教え始めた。

そのころ、女性を取り巻く状況は大きく変わろうとしていた。ケネディ・ジョンソン両政権下で、内容は不十分なものの、労働における性差別を禁止する法律が相次いで成立した。さらに、１９６０年代後半から盛り上がった女性解放運動が決定的だった。ギンズバーグは、社会の性差別をなくすこと、それこそが自分のやりたいことだと確信した。ほどなくニューヨークの著名な人権団体「アメリカ市民的自由連合」の顧問弁護士として訴訟に携わるようになり、史上初めて性差別を争点として最高裁で争い、１９７０年代を通じて6件のうち5件に勝訴した。「家事・育児を担う女性を守るため」という理由で作られた数多の法律が、憲法で示された「法の下の平等」に照らせば違憲であることを、ギンズバーグは地道に粘り強く示していったのだ。

こうした活動が評価され、ギンズバーグは１９８０年にコロンビア特別区巡回区連邦控訴裁判所の判事に任命される。１９９３年に連邦最高裁判事に就任してからも数多くの重要な判決を導き出したが、１９７０年代の活動がとりわけ高く評価されているようだ。従来、アメリカ現代史の書物で描かれる70年代の女性というと、もっぱら女性解放運動が中心であり、私もそのように理解していたが、ギンズバーグの業績について学ぶことで、より重層的に捉えられるようになった。今後、彼女に関する研究が進めば、この時代の叙述も変わっていくかも知れない。

（アメリカ現代史・ジェンダー史）